

# よろずは

平成二四年

八月号

万葉文化館 おすすめ万葉歌

ひさかたの 天あまの川瀬せに

船ふね浮うけて 今夜こよひか君きみが

我わが許が来きまさむな

万葉集 卷八―一五一九 山上憶良やまのうえのおくら

【口語訳】

久方の天の川瀬に船を浮かべて、今夜はあなたが、私の許においでになるでしょうか。

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

「七夕たなばた」といえ、七月七日の行事としてよく知られています。一年に一度しか逢えないといふ、牽牛と織女の伝説も有名です。

この歌は織女の立場からの歌で、天の川を船で渡り会いに来る、牽牛を待つ織女の心情を想像して表現しています。中国に残る本来の伝説では、仙女である織女が牽牛のもとを訪れますが、古代の日本に伝わり、当時は男性が女性のもとへ通う結婚が一般的だったことから、この歌のように変容したようです。

当時の暦は、現代の暦とは一月程の季節感のずれがあります。現在、当館をはじめ、各地の「七夕祭」が八月に実施されることもあるのは、旧暦にあわせてのことです。

この歌は、神亀元年（七二四）の七夕に、当時左大臣だった長屋王ながやのおおきみの邸宅で、山上憶良がよんだ歌です。当時、六十代半ばの男性であった憶良が、伝説上の女性になりきって詠んだことを想像すると面白いですね。

【万葉古代学係】